

ベルクソン紹介 第5回

「精神のエネルギー」を読む



第441回 三水会 2016年3月16日

野口幹夫

序 開かれた哲学

2004年の三水会で第1回の「笑い」からはじめたベルクソンの哲学の紹介は、今年まで10年かかって今回で終わりに来た。(巻末註)。

ベルクソンは一言で言って「いのちの哲学」である。かれは「いのちの流れ」を、宇宙の始りから人間の精神の開花に至るまでの全過程を素描した。しかしそれは完結したものではない。ベルクソンの哲学は未来に開かれたものだ。

未来に開かれた哲学というのは、二つの意味がある。その第一は彼自身が言っているように、哲学というものは、科学と同じく、また科学の影響を受けて、絶えず発展する知見とともに、哲学もまた発展していかねばならないという意味だ。彼のいのちの哲学は、彼の時代つまり20世紀の初頭までの科学の尖端を踏まえていて、かつそれを乗り越えて、驚くことに20世紀の後半の科学がやっと到達した視野まで持っていた。ベルクソンは哲学が、科学や社会の歴史と両輪で進歩する姿こそあるべくものとしていたのだ。

「未来に開かれた」には第二の意味がある。それは今回「精神のエネルギー」で紹介するテーマそのものだ。これまでのテーマについての彼の論究の進め方は、まずそのテーマに関するこれまでの哲学を紹介しその批判の上に自論の展開を行って、それなりに完結した形をとっている。しかしこの「精神のエネルギー」については、彼はいわば序論として、その探索の可能性とふさわしい方法論を示唆するにとどめ、その先は未来の探究を未来の人類に託したのである。これからの人類が決して避けることなく真剣に取り組むべきテーマであることを示唆して終わっているのだ。

自分にとっても、このテーマはベルクソンに始まり、彼を越えていくべき今後の最大のテーマである。したがってこのテーマの報告は1回で終わ

らない。第1回はベルクソンの本文の紹介とその時代背景をのべるが、続けて第2回はベルクソン以降、現代にいたるまでのこのテーマに関する探求の成果と展望を報告したい。

第1章 「精神のエネルギー」の紹介*1

他の主著と違って「精神のエネルギー」として出版された書は、7つの独立した小論文や講演を集めたものだ。その中のどれにも、単独に「精神のエネルギー」と題したものは無く、包括してこの名前が付けられたものだ。この7つの小文の配置は、ベルクソン自身によってなされたもので、そこには意味がある。

始めの3つは講演の記録で、それらは1911年から1913年までの短期間に行われている。場所と対象は違っても、すべて哲学の専門家対象ではない広い聴衆を前にして語りかけているという特徴がある。他のベルクソンの主著はすべて哲学者も対象にかかっていることと比較すると、この講演集は比較的理解しやすいのはそのような性格のためだ。

またこの1911~13年という年は、ベルクソンの人生にとっても特徴的な時期にあたっている。1900年コレージュ・ド・フランスの教授となってその名声を確実なものとし、1907年には最大の主著『創造的進化』を完成させて大きな山を越えた時期にあたる。またこの3つの講演の直後の1914年にはベルクソンはフランス政府の道徳・政治科学アカデミーの議長に選ばれ、フランスの知的人材のトップとしていやおうなしに政治に巻き込まれていくのである。時はまさに世界は第1次大戦に向かって歴史が大変革に向かう時であった。

いわば、彼の人生のはざまというか、句読点の様な時期に彼は憑かれたように、あるテーマで民衆に語りかけたというのが、これら3つの講演集

なのだ。それを続けて読むとある鮮明な意図を感じるし、この後の遺作となった大著「道徳と宗教の二源泉」においてさらに深く掘り下げられるテーマにつながっていく。

この3つの講演集がこの書の主要なものであり、後の4つの論文は、この3つの講演の前に専門雑誌に発表されたもので、明らかに論調が異なり、特定の細かいテーマに絞られており、この3講演集のテーマへの下準備であるといってもいいであろう。そのような構成のため、ここではまず主要な3つの講演集を詳しく紹介し、後の4つの小論文は簡単に要約で紹介するにとどめる。

第1講演 意識と生命

(1911年5月イギリスバーミンガム大学でのハクスリー記念講演)

いのちの問題は何らかの原理から演繹して答えがでるものではない。経験によるさまざまな領域にさまざまな事実のグループがあり、それだけでは答えはないが、それを見つける方向を示している。方向がいくつも示されるとすれば、それらの方向が同じ1点に集中していれば、そこに求めているものが見つかるようなものだ。今持っている事実の系列はまだ必要なところまで届いていないが、共同の努力によって、実証科学と同じようにこれについての哲学も進歩するだろう。

精神はまず意識から始まる。そして意識は記憶に結びつく。また意識は未来の予測である。生活に対しての何らかの注意が意識であり、意識はいうなれば過去と未来に渡された橋である。

意識のある存在とは何か。神経中枢のあるものだけに意識があるとするのは誤りだ。単純な神経系のみを持つ生物もあれば、さらにはそれも未分

化の原生生物にも意識はある。生きているものすべてに意識はある。多くの植物のように自発的な運動のない生物の意識は眠り込んでいる。自由な活動に向かっているときはその活動は高まる。生命は躍動する。物質環境と戦いつつ、物質を利用しながら、人間にまで進化した。「飲む」を持てるようになったことがその勝利と成功のしるしである。それは創造の喜びである。すべての人間にとって、自己による自己の創造、内部を豊かにし、人格を大きくすることである。

さらにその中でも最も優れた人々は、生命の運動の前進を続け、人体という芸術作品を乗り越えて、道徳的な生命の限りない創造的な流れを生み出した。人類のすべての人々を高めるために。

人間の心的活動は脳の活動を越えている。脳は運動的な習慣を蓄積するが、記憶を蓄積するのではない。思考も脳から独立している。そのことから人格の保存、その強化も、身体がなくなった後も可能でありうる。

意識は、人間に達する間にこの世で物質を通過していく間に鍛えられて、もっと効果的な行動のために、もっと強い生命のために、備えていると推測できる。死後の精神の生命は、やはり闘いの生命として、創造的な進化として思い描くことができる。しかしこれについては、我々は無知である。しかしその無知は決定的なものではない。意識に来世があるならば、それを探る手段がやがて見つかるはずである。かつては、知りえなかった惑星の外の星の元素組成も今はわかるようになったのだから。

第2講演 心と身体

(1912年4月「信仰と生活」での講演)

こころと身体の結合と分離は経験の事実だ。身体は物質と同じ法則にし

たがうが、意志的な運動は別だ。自由に動く原因は「我」にある。我とは自分の身体から、空間的にも、時間的にも越えている。知覚は身体を越えて星まで広がっている。身体は現在の時間と空間に限られた存在だが、心は、これからあふれ出している。

これに対して所謂「科学」の名で反論がでる。こころは脳の一部の運動に過ぎないと。その主張は「科学的」ではない。物理現象を要約した「エネルギー保存の法則」は意思による自由な運動の創造には当てはまらない。命の本質は、物理的法則に従うだけの物質を、自分の目的のために転換することにあるからだ。

自由意志は、繰り返しの効く運動だけを扱う物理の手法では、あつかえない。

経験的に、魂が身体につながっていることは事実だ。実験と観察の科学によっていえることは、脳と意識の間には、ある種の関係が存在するということだけだ。こころの動きが身体に行動を促すとき、たとえば言葉を発するとか身振りをするとかに応じて脳は活動する。しかし思考は脳から独立しているので、逆に脳は、精神と、身体の実実との接触を絶えず維持する役割を持っている。

言語の記憶と脳の関係は、病理的にも解剖学的にも研究が進んだ。脳が関係する場所も判明した。心体平行説の有力な証拠となえた人もいた。しかし失語症の実際は、まず固有名詞が失われ、次に普通名詞へいくが、動詞は最後まで失われない。このことは脳に語の記憶が収容されているのではなく想起の機能が、つまり言葉の動作の機能がおかされるだけということを示している。言葉の記憶は脳にはないことが証明されたことになる。記憶は精神の中にある。精神は意識であり、まず記憶だからだ。

心体平行論のように、脳と心の中に等価関係があるとすれば、意識は脳の運命に従い、死はすべての終わりということなるが、経験はその反対で

あり、魂の残存を肯定することになる。

魂の生をそのすべての表れにおいて研究するのは哲学の課題だ。

いのちの哲学は、経験から推論される確実な蓋然性の増大の中ですからこし
つつ確実性へと導くであろう。

第3講演 〈生きている人のまぼろし〉と〈心霊研究〉

(1913年5月ロンドン心霊研究会での講演)

ロンドン心霊研究協会の議長として招かれたことを心から感謝している。多くの偏見と闘い、嘲笑を撥ね返してこられたこの協会の勇気を称える。心霊科学に対する偏見、科学の名において非難しているのは本当の科学者ではない。

偏見を持つものには、ある無意識の哲学がある。それは対象となる現象の研究方法が、自然科学が用いる方法ではないことに、不愉快を感じるのである。テレパシーが現実のものであれば、それは自然現象のようにすべての人に際限なく現れるべきものだ。それは物理科学のように研究されるべきだと考えるのだ。

しかし現在、心霊研究は文献調査や証人調べのような手法で行われている。この協会で行われた長年の膨大な調査結果は、テレパシーの存在を確実なものとするに至っている。それは数学的な確実性のもではないが、少なくとも歴史や裁判の場合に得られた確実性と同じものだ。

自然現象ならば実験室で観察されなければ科学的ではないとし、また具体的なものに対する軽蔑がある。具体的な経験を抽象化して数値で表し統計処理できるようにしなければ科学でないと考えられるのだ。

しかし精神的なものの本質は計量にゆだねることができないところにある。

テレパシーが誰にでも行えないというのは、それが微弱すぎて、特別な能力がないととらえられないのかもしれないし、また脳のメカニズムに抑制機能が働いているからかもしれない。それを証拠立てる記憶の例をあげよう。

記憶を呼び戻すのは生活に役立つものだけであるが、それは精神が生活に向かって緊張している時であって、死に直面した人が一瞬にして過去全体の記憶をパノラマのように見るという経験が多くある。それは生に対する緊張が薄れれば、記憶のすべてがよみがえるということの意味している。

同じように我々は生活に必要なものだけを知覚しているが、実際は潜在的にはもっと多くの知覚が行われている。行動に適さないものは意識から遠ざけているのが脳の役割なのだ。それは記憶の利用と同じである。例外的な状況や特別な素質のある人間においては、普通は、無意識のうちに失われる知覚が、意識の中に入ってくることもありうるのではないか。そのような知覚があるならばその究明は心霊研究が力を発揮する。

体は空間に縛られているが、意識が空間を越えた交流をしているとしても、それは日常生活には邪魔になるから無意識の中に捨てるメカニズムが安全弁のように脳にはあるのかもしれない。その抑制装置が働かない場合境界を越えることは大いにありうる。ここでも心霊研究が力を発揮することになる。

先に述べたように、肉体の滅びた後に魂が生き残ることは自然なことだとすれば、心霊研究は非常に広い領域が開かれている。数学や物理が千年の歴史があり、化学が 18 世紀に登場した。心霊研究はまだ始まったばかりだ。・・・」

ここに詳述した前の 3 つの講演集が主要なものであり、以下の 4 つの論文は、この 3 つの前に発表されたもので、この主要論考への下準備であるとみられるので簡単に紹介しておきたい。

4 夢

(1901年5月心理学総合研究所における講演)

目ざめて生活に緊張しているときの記憶の呼び出しかたは、睡眠中の生活への無関心と弛緩状態における無秩序な記憶の呼び出しとは違う、夢を題材に記憶の呼び出し方を論じた。これが第2講演の心と身体につながっている。

5 現在の記憶と誤った再認

(1908年12月「哲学雑誌」に掲載)

デジャヴの現象を心霊的神秘的なものでなく、知覚と記憶の二重化する現象として解明している。その二重化はふつう無意識なのに、生活への不注意の状態で起きるとした。知覚と記憶の広さに関する所見。

6 知的努力

(1902年1月「哲学雑誌」に掲載)

人間精神が問題を解決しようとする時、ある意図をいだいてそれを実現するために具体的なイメージにすると、我々が行う知的努力とは何かを問うている。さまざまな意識記憶の平面とそれを横切る精神の動き、その意図を動的図式とし、さらにそこから具体的なイメージ生み出すことを行っている。そのことによって非物質的な精神から、物質化への動きを生む。

7 脳と思考—哲学的な錯覚

(1904年道徳形而上学雑誌に掲載)

近代科学が主張する脳と心の同等性説の誤謬を、観念論と实在論のあいだのすり替え錯覚として反論した論文。これを踏まえて1~2の精神の独立の考えにつながっていく。

第2章 ベルクソンの示唆

「精神のエネルギー」で示されたテーマは、彼の全哲学の中でも中核になるものであると私は考えている。しかし皮肉にもこの論究は、ベルクソンの名声を傷つけるものとして、一般の哲学者からも、さらにはベルクソン研究者の多くからも無視されているのが現実だ。そこで彼の全哲学をサマリーした上で、この論究が中核的位置を占めていることを確認したい。

- 1、彼の哲学は「いのちの哲学」である。いのちとは意識であり、記憶である。生きものは、もっとも単純な生物でも、食べ物を選択し摂取するために意識をもち、記憶する。(物質と記憶)
- 2、いのちは宇宙のはじまりから創生した。いのちに内在する推進力「エランビタール」によって進化し、あるものは停滞していった。そのいのちの飛躍の最高段階の人間は「精神」を得た。「いのち」の最初の起原からわれわれの時代にいたるまで、唯一の衝動、恐るべき推進力に従って人類全体は驀進する。そのめざましい進撃は、あらゆる抵抗を撃破し、幾多の障害を、おそらくは死をさえも、克服することができよう。(創造と進化 エランビタール)
- 3、人間の精神は、さらに進化を進めるであろう。戦いから愛へ、楽しみを求めるものから喜びを知るものへ。閉じた社会・魂から、開かれた魂・社会へ、そして新しい人間種への飛躍をなしとげるであろう。
(道徳と宗教の二源泉)
- 4、精神は、肉体から独立している存在だから、肉体の消滅によっても共になくなることはない。来生を含めた人間の精神間の感応は存在する。人間がもつ未知の能力の可能性を否定してはいけない。(精神のエネルギー)

5、精神の科学が新人種への道を開く

人間は科学技術の進歩によって、物質的基礎を人類は充分得た。その力にふさわしい精神的エネルギーを人類が持つとき、人類はいわば新しい種、さらに言えば、動物種としての存在から開放されることになる。その引き金を引くのは新しい精神科学であろう。物理・化学は、物質の探求で奥深い成功を収めつつあるが、その手法では人間の精神の探求は行えない。それにもかかわらず、精神世界の探求を非科学的と決め付け、学問の世界から排除している。そのため例えばテレパシー現象など、多くの実証的データがあるにもかかわらず、あたまから疑いの目で見られ、研究は進まない。それでも勇気ある人々によって、精神科学は端緒につき、この知られざる大陸のほんの一部をうかがえるようになった。「この未知の世界からの微光がわれわれへまで届いて、この肉の目にも見えたとしよう。そうなれば、ただ目に見え、手で触れるもののみを、存在するものと考え習わしてきた人類に起きる変化は、いかばかりであろう。」

大部分の人にあって素朴に信じられている死後のいのちについての漠然とした思いが、この精神科学の新たな発見によって人々の確信となりさえすれば、人間は今のような快樂にかじりつくことはないだろう。

それは、人間種にふさわしい精神のエネルギーを与え、その時人類は新しい種に飛躍することだろう。 （道徳と宗教の二源泉）

ベルクソンの哲学のすべての流れの決着が、人間の精神の開花を目指しており、それが死後の魂の存続の信念によって支えられることを示唆している。「精神のエネルギー」に収められた3つの通俗講演がその精髓を語っているのだ。

第3章 3つの講演の1910年代は大転換期であった。

ベルクソンが3つの講演をした1910年代の初め、彼が懸念したことがまさに起きていて、もはやとどめようもない潮流になりはじめていたころであり、それは現代まで続いているといえる、ある巨大なターニングポイントの時であった。

何のターニングポイントであるかを理解するためには、その前後のある潮流を説明しなければならない。

それは人類がこの時期を機に、その後の100年間、それまでは人類が失うことのなかった超越者への畏敬の念を全体として失い、それどころかそれを軽蔑した時期が現出し、現代もそれが続きつつあるということなのだ。

さらに言えば、その前の一世紀に驚くべきことが世界に起きていたのだ。それは、あたかもその喪失の危機を迎える警告を発しているかのように、超越世界からのさまざまなメッセージが発せられ、世界各地でそれを受けとめる事件が発生したのだ。それまでは何世紀に一度といった頻度で、偉大な宗教創始者が現れ、彼を通じての超越者からのメッセージを人類は受けることができたものが、ごく普通の個人たちに、超越世界からダイレクトにコンタクトされ始めたかのようにであった。人類のある成熟を見極めて、あるいは見切りをつけて、超越世界が判断したかのようにである。

現代人の我々からは忘れ葬り去られ、今聞いても迷信と一笑に付されてしまうような心靈現象の数々が、その歴史的な100年に発生し、それをめぐる賛否両論が、全世界に吹き荒れたのだ。それは突然の奔流のように起き、あたかも高次の世界が、うつせみの世を揺り動かすべく、一斉に仕掛けたかのようにであった。一九世紀の前半から20世紀のはじめにかけてのことであった。

日本では、後に天理教や大本教として知られる神道系の新興諸教団の源

流となる神からのお告げが、名もなき老人老女たちにもたらされた。

欧米ではアメリカのニューヨーク州の片田舎のポルターガイスト現象に始まり、リンカーン大統領を巻き込んだ。そこから、フランス、イギリスに波及し、ヴィクトル・ユーゴは膨大な霊界通信記録を残した。イギリスでは、当時の先端的な物理学者や超一流の小説家・哲学者・政治家がその騒ぎに巻き込まれ、それを学問の目で確認しようとする組織ができた。

スピリチュアリズムという新しい信仰宣言が高らかに述べられたが、たちまちに既成の宗教集団からなどの非難の渦に巻き込まれた。

しかしやがてそのにぎやかな潮流は電気の普及とともに変わり目を迎える。ろうそくの薄暗い夜の空間が、徐々に電灯によって昼のように明るくなった。電灯や無線通信に象徴されるような電気を中核にした科学技術が一斉に花開いてくる。

薄暗さの中で、またまだまだ信心深い人々の精神の中で、驚異のまなざしで見つめられた各種の心霊現象は徐々に疑いの目で見られるようになった。見えないもの、科学的でないものは迷信として迫害され、葬り去られるようになった。第1次・第2次と続いた世界大戦、そのための急速な技術開発、エネルギー開発など、現代につながる唯物論的諸思潮が澎湃として世相を支配する時代、心霊研究は、その前にいかんとすることもなく崩壊の危機に瀕していった。ベルクソンは、これまでの名声を失う危険を冒してでも、心霊学会会長を引き受け、最高の哲学的な知性をもって、心霊現象の冷静な研究の重要性を訴えたのだ。

この講演の前の100年をふり返ってみよう。

4-1 日本の江戸末期の神霊現象

日本でも江戸時代の末期にあたる19世紀、神のお告げを直接受けたという人が次々に現れ、病を癒し、いろいろの苦しみを助ける奇跡を起こした。彼らは弾圧を受けることも多かったが、今も繁栄する神道系の新宗教をつくりあげた。日本で同じような新興宗教の発生があったのは鎌倉時代の新興仏教である。日蓮宗、親鸞の浄土真宗、道元の禅宗が生まれた時代であるが、これらはいずれもルーツは中国にあり、それに我が国独自の接ぎ木がなされて成立したものだ。しかし19世紀に起きた新宗教はこれとは違い、名もないあるいは無学の老女などが「神からの啓示を直接受けた」というものであり、米欧で起きた心霊現象と時期も現象も共通するものがある。それ故この中の一つ大本教に触れかつ、世界の心霊運動とも結びついた英文学者浅野和三郎も出たのである。これに該当する黒住教、金光教、天理教、大本教の4つの神の啓示について紹介する。

黒住教

教祖神・黒住宗忠は、代々今村宮（岡山市北区今）の神職。33歳の時、両親が流行病によりわずか1週間の内に相次いで亡くした。宗忠自身も肺結核に侵され、2年後には明日をも知れない状態に陥った。死を覚悟した宗忠は、文化11年（1814年）1月の厳寒の朝、毎朝のように手を合わせ日の出を拝んだ。この“最期の日拝”の祈りの最中に、新たな“生”への祈りに転回した。冬至の朝昇る朝日に祈りを捧げていると、天照大御神と神人一体になり、悟りの境地に立った。宗忠の死後、安政3年に神祇管領長上・吉田家より「宗忠大明神」の神号を与えられた。明治9年（西暦1876年）独立し、神道黒住派と称す。以降の近代神道運動のさ

きがけとなった。今日、神道系の新宗教で一般的になっている主神（すしん。宇宙主宰神）という考え方の嚆矢でもある。天理教、金光教、大本教、生長の家、等、後の新興宗教の走りであるといえる。

金光教

金光教の教祖「金光大神」は、46歳のとき（1859年・安政6年）神から、家業である農業をやめ、人の願いを神に祈り、神の願いを人に伝えて、人を救い、神を助けてくれる「取次」を頼まれた。

人を助けずにはおかぬという天地の親神の切実な願いを身に体し、神と人を結ぶ「取次」によって、神も助かり人も立ち行く世界を開いた。

金光大神は、「生神ということは、ここに神が生まれることである」と語り、生神とは、特別の人のことではなく、信心すればだれでも生神になることができ、人の心の中、働きの上に神が生まれる。天地金乃神は、神の思いに沿わない人間を切り捨てるようなことはしない。神が人と離れて存在するのではなく、「人間がおかげ（神の助け）を受けてくれなければ、神も金光大神も嬉しくない。この金神は、仏もキリストもいとわない。みな神の氏子だ、」という。

天理教：

天保9年（1838年）10月26日、大和の庄屋中山善兵衛の妻みき（41歳）は、神の啓示を受け、みきの体に、世界と人間を創造した神様である親神・天理王命が入り込んだ。以来、教祖（おやさま）は人々に教えを説き、自ら人をたすける手本を示した。人々の病気を治すなどの奇跡を起こし、近隣の住民の信仰を集めた。地域の寺社から疎まれ、さらに教祖は逮捕・拘留されるなど、幾度となく官憲から弾圧を受けた。教祖

が90歳を迎えるころ、迫害干渉は激しさを増した。そして明治20年（1887年）現世での姿を隠した。しかし、教祖はいまも存命であり、世界中の人々が仲良くたすけ合って暮らす「陽気ぐらし」世界の実現に、働いていると信じている。1885年（明治18年）「神道天理教会」として認可された。

大本教

1892年（明治25年）京都府綾部の、霊能者出口なおに、「うしとらのこんじん」と名乗る神が憑いた。彼女には神示が、お筆先（自動筆記）という直接内流によって伝えられた。1898年（明治31年）出口王仁三郎が彼女と出会いその養子となり教団組織を作る。やがて戦前の日本において、有数の巨大教団へと発展した。出口王仁三郎には、瑞霊系の神懸りによって、神示が直接内流として伝えられて、『霊界物語』の口述が開始されることになった。宇宙万物を創造された主神の愛善にもとづき、人心の利己主義と弱肉強食を克服した地上天国建設を目的とする。またすべての宗教は究極の实在（一つの主の神）から出ている“万教同根”の真理に基づき、各宗教が大和するよう働くとする。戦前、天皇制に反するとして二度の弾圧を受け、組織と施設に潰滅的な被害を受けた。大本教の信者に海軍教官の浅野和三郎や後の成長の家の谷口雅春がいた。

以上、江戸末期から明治初期にかけて、つまり1850年代から世紀末にかけて次々に神のお告げを聞いた人たちが起こした信仰集団の信仰は、勢いがあった。そしてその信条は、神道とはいえ、ナショナリスティックなものではなく、世界的でむしろ宇宙的であって、基本の人生観の明るさに驚く。それ故にこそ、今も様々な分派を作りながら、日本から始まり、世界各国に布教を成功させているのだ。

4-2 アメリカでの発端*2

欧米での怒涛のような心霊現象運動の発端はアメリカ東部ニューヨーク州で起きた。靴屋の徒弟だったアンドリュー・J・デイヴィスは小学校だけの無学な青年だったが、子供の時から、時にある特殊な心理状態におちこみ、また不思議な声を聴いたりする特異な能力を持っていた。17歳の時、催眠術に関する講演会に、洋服屋の仲間といっしょに参加したのかきっかけで、それ以降この二人で組んで様々なことを始めた。催眠をかけて入神状態になるとデイヴィスには人体の透視ができる能力ができるのを利用して、病気の相談や治療を行ったのである。

そんな彼が1845年入神中に知らないが恐ろしく博識の人に出会い、その人からの知恵の伝授をうけてそれを口述し始めた。それを周りの人が筆記した大部の著作「自然の原理—その聖なる啓示と人類への声」を完成させた。無学の靴屋の徒弟が到底現せない高度で説得力を持つものであり、続編も合わせて3部作が発刊された。

そんな彼に1848年3月31日こんな出来事が起きた。「今朝明け方に私は暖かい息を顔に感じ、やさしい声が強い調子でこういうのを聞いた。『兄弟よ、よい仕事が始まった…見たまえ、生のままのデモンストレーションが始まったのだ。』これがどういう意味なのか、私は考えざるをえなかった。」

生のままのデモンストレーションという言葉は「自然の原理」の中ですでに述べていたのだ。「肉体の中にある霊と、より高い世界にいる霊とが交信する。間もなくそれは生のままのデモンストレーションの形で行われるであろう。」と予告していたのだ。

そしてまさにその日アメリカを揺るがす事件が同じニューヨーク州の別のところハイズヴィルという小村で起きた。後に「フォックス家のボル

ターガイスト現象」と呼ばれた事件だ。この家の人々に呼びかけるような音が鳴り、若い娘がそれに応じたところ、なにかの霊的存在が呼びかけていることがわかり、やがてそれが、かつてここで殺された行商人の霊であることが判明した。それは、家族だけでなく、驚き集まった村人たちの前で起きたのだ。

この叩音は始め問いかけにイエスは1回ノーは2回で答えよといった簡単なものであったが、やがてその回数にアルファベットを当てはめるという約束事を霊との間に取り付けることで、一挙に通常の意味疎通ができるようになった。この方式は、ここから始まり、この後アメリカやヨーロッパに心霊現象が起きるところに広く使われた。英語フランス語などヨーロッパ語がアルファベットを共通にしていることもあるが、霊界でその方法が共通化されるような連絡が取られているかのような不思議さがある。

このフォックス家の少女たちは、後に都会に出ても、霊界との交信ができる能力を持ち続けたため一躍有名になった。また彼女たちの活躍に刺激されて、同じような霊的能力をもつ人たちが次々に現れた。それを予告した先のアンドリュー・J・デイヴィスの驚異の本も識者の絶賛を浴び30年に亘る大ベストセラーになったのである。

明確な証言が残されていることだが、リンカーン大統領はこの運動に共鳴して霊媒能力者を重用し、南北戦争の終結を待たずに、奴隷解放宣言を先行して発表したのは、霊からの進言によるものでそれは戦争終結を早めたとされている。

4-3 ヴィクトル・ユーゴの心霊交流*3

叩音による意思疎通は、イエス・ノーだけの交信ならば問題ないが、アルファベットに置き換えて文章を聴きとるというのは大変困難な作業だ

が、それを毎晩深夜明け方まで2年間やり続けて膨大な記録をのこしたチームがいる。フランスの大作家ヴィクトル・ユゴーとその家族たちだ。

ヴィクトル・ユゴーはすでに国民的作家となっていたが、ナポレオン三世が共和制の中で大統領に選ばれていたにもかかわらず、クーデターを起こし、共和制を停止し帝政をひいたのに反対し、抵抗運動の末身の危険を感じて、1853年英仏海峡のジャージー島に亡命した。

この孤島の海岸沿いの邸宅に落ち着いた後、間もなくフランスから女流作家デルフィーヌ・ド・ジランダンをお客として迎えた。彼女はパリ社交界の華と謳われた才媛で、当時パリで大流行だった降霊術をもちこんだのだ。

それは大きなテーブルの上に小さな三脚の丸いおもちゃのテーブルを置くだけの舞台であった。テーブルの周りにユゴーの家族・友人とジラルタン夫人が座った。日曜日の夜のことであった。しばし沈黙のうちに丸テーブルが震え始めた。そしてジラルタン夫人の「お前は誰？」と問いかけに足を1本持ち上げた。「何か嫌なことがあるの？もしあるのなら1回こつんと叩いておくれ。ないのなら2回叩いて」テーブルは1回こつんと叩いた。そこから会話が始まる。問いかけは言葉で、相手は足の叩音で答える。その叩く回数をアルファベットに対応させるというルールはすでにアメリカやパリで流行していたため、ここでは説明の必要もなく会話が始まったのだ。たわいない応答が続いた後、初めは疑っていた参加者も真剣になって没入したころ、そのテーブルに出ていた相手が10年前に舟遊びの事故で亡くなったユゴーの愛娘レオポルディーヌであることが分かり、遊戯の場のつもりであったのが、一挙に驚愕の場となったのだ。レオポルディーヌはもうこのような場に出て来ることはないといって去ったが、その晩以来テーブルとして出てくる相手は次々と替わり、この島を去る2年の間毎晩このチームは根気強く対話を続けた。モールス信号のようなアルファベット通信は解読するのは恐ろしく集中力を要するし、深夜から明け方ま

で続くことも多く、終わると疲労困憊してしまった。それを続けたのはこの対話がいかにアトラクティブであったかを示している。異界の相手もまた述べたい意志をアルファベットにし、さらにそれを叩音の回数に変換してテーブルを動作させるというのは神業だ。彼らは毎晩、替わって訪れた。例えばシェクスピアが現れて、詩作を共にしたこともあった。さらには劇や詩の魂といった抽象的なものや、彫刻のライオンまで登場する。最後にはテーブルがその脚につけた鉛筆で画まで書いたのだ。ユゴーやその秘書役がこれらを丹念に記録し4冊のノートに残された。ユゴー全集の第9巻に収められて、我々も読むことができる。

このようなテーブルタッピングによる降霊の愛好者はこの1850年代にアメリカで300万人以上、パリでもすべての社交場の夜、人々はテーブルに真剣に向き合った。朝の挨拶は「昨夜のテーブルのご機嫌はいかが？」とかわされたという。

4-4 イギリスの心霊研究*4

産業革命で先行し、パックスブリタニカの全盛を迎えていた英国は、ニュートン以来の科学のリーダーでもあり、王立協会という科学推進の中核組織もあった。その英国に心霊現象がアメリカから伝わったのは19世紀の半ばだ。伝えたのも社会の上層部からで、関心を持って受けとめたのも、一流の知識人であった。社会主義者のロバート・オーエンや、物理学者ウィリアム・クルックスなど名だたる知識人がいた。冷静な批判眼を持った人たちに迎えられたが、当然ながら心霊現象は信不信両論が渦巻いた。

英国らしい対応は、この心霊現象到来に一方的に身をゆだねることなく、それを科学の目で確かめようとしたことであった。まず1869年にはロンドンの学術団体の一つが調査委員会を立ち上げた、33名の科学者医師技術

者、弁護士、神学者など実力ある人々で構成された。1年かけて400頁に亘る膨大な調査報告書をまとめあげた。委員の多くは否定的な態度で調査を開始したが、この調査活動のなかで、態度を変えざるを得なくなり、ほぼ心霊現象の特異性を認め、結論的意見として、今後さらに真剣な研究に値すると提言したのだ。しかしながら、この研究の成果にたいする世間の批判は冷笑的なものが多く、それ以上の研究続行はできなかった。

しかし心霊現象をインチキとしてそれを暴こうとする人たちも、逆にそれを信奉する人達も側からも、盛んになる心霊現象を科学的に探求しようとする点では一致していた。そして1882年ロンドンで世界で初めての心霊研究協会（Society for Psychical Research）（SPRと略称）という恒常的な研究機関が設立された。主催者たちはこの研究会が信頼できるものであることを、まず世間に認知させなければならぬと考え、学会、政界の超一流の人物を会長に招いた。その多くは引き受けた。彼らが世評を恐れずにこの職についたのは、それほど身近に不思議な心霊現象を見せつけられる機会が広がっていて、証明されてはいないけれどその存在を無視することはできなくなり、その科学的根拠を求めたいとの願いが世間で認知されて、公的なものになっていたからに他ならない。

1913年にはベルクソンが招かれて会長となり、冒頭に紹介した就任演説をしたのであった。そのほかの著名人をあげると後の首相アーサー・バルフォア、電気学の創始者レイリー卿、同じくトムソン、ルイス・キャロル、ジョン・ラスキン、グラッドストーン、詩人のテニスン、作家コナン・ドイル、アフリカ探検のリビングストーン心理学者ウィリアム・ジェームス、カンタベリー大僧正などなど枚挙のいとまがない。彼らのバックアップを得て、協会は6つの分科会を作り、現象の事例を膨大に収集整理した。中でも想念の伝達すなわちテレパシーに関する部会は成果をあげ、「生者の幻像」という著作を出した。彼らは3万枚もの調査票を配布し700の事例

を集め、個々に調査の上、13件は事実であると判断したと紹介している。その事例のほとんどは遠隔の地での死に関する伝達であった。

ベルクソンの会長就任講演は、この委員会報告が出版されてから30年後のことになるが、彼が例題として取り上げて研究の必要を訴えた心霊現象も、これと同じような直近に死んだ人からの留守宅への伝達の事例であった。ベルクソンが講演した1914年のヨーロッパは第1次世界大戦が終わった直後で、戦場で命を失った戦士も多く、遠く離れた留守宅の妻にそのいまわの姿を伝えるという緊迫した状況が日常茶飯におきたようだ。この話を聞いた科学者が、その内容のリアルさに耳を貸さず統計処理をしなければ科学的でないとしたことにベルクソンは批判し、科学とは異なる方法からはじめることによってのみその研究を広げられると指摘したのだ。

心霊現象の大ブームに対して人々の対応は3種類に分かれた。*6

まずこれら心霊現象を、死後の生存を信じその霊界からの働きかけがあり、それを受けとめる能力のある人間がいるのだと素直に受けとめる人々だ。20世紀には激減したが、19世紀の初めには大多数を占めていた。

それに対し死後生存ということ信じない人たちがいる。そのような人々も心霊現象に対する対応はわかれた。

懐疑的ではあるが、繰り返し事例に接しているうちにそれらを事実としては認めるが、それらを霊界からの働きかけによって起きているという解釈は否定し、心霊現象は人間の深層心理や特異な未知能力によるものとする考えをとった。この流れはその後、超心理学として発展していく。

最後は一切の心霊現象を非科学的であり得ないものとし、不思議な現象には必ず意図的な不正があるはずと考え、霊媒とされた異能の能力者にたいして、その人格を否定するような厳しきで接したし、それに関連する研究テーマをタブーとしてすべての学会から放逐する動きをとった。

4-5 新宗教としてのスピリチュアリズム

先に述べたように英国の SPR による膨大な事実の収集と吟味によって死者からその縁者へのテレパシーは否定しえないものと認定された。その調査対象にはならなかったが、実際行われた異界通信の中にはもっと大規模で重要なメッセージがあった。それは霊界の姿や人間の死後の遷移の形や魂の成長についてそして人間の存在の意義まで、人間に教えようとするものだ。

先にも述べたがアメリカの A・J・デイヴィスは、極めて高度の知性からの口述筆記によって、「自然の原理—その聖なる啓示と人類への声」を完成出版した。そこには宇宙創成理論や太陽系の誕生のことが述べられていてそれらは 20 世紀になって宇宙科学の確立を待って完成した現代の宇宙観と狂いが無い。またイエスキリストを人間の子であり偉大な改革家であるとのべ、神格化したカトリックの伝承に誤りがあると述べている。1856 年フランス人アラン・カルデック（自身の本名ではなく霊界の伝達者の名前を名乗っている）が、多数の霊からの証言をあつめた「霊の書」を書き、多くの信奉者を作った。1872 年には SPR 創立者の一人ステイントン・モーゼスが自動筆記書「霊の書」を書き、1903 年にはすでに逝去した元 SPR 会長の F・R・マイヤーズが、死後彼が体験した霊界についての情報を、面識もないカミンズ嬢に口述筆記させた「人格と死後の生存」*8 が世に出た。

これらのメッセージの内容は異口同音に、人間存在の死後の継続と霊界における成長の階層を語っている。これらのメッセージを新しい時代の到来と受け取り、自らの信条として受け入れた人達をスピリチュアリストと呼び、その新たな信仰体系をスピリチュアリズムと呼ばれることとなった。1890 年から 20 世紀の初頭にかけて英国からはじまって世界的なスピリチュアリストの連合ができた。採択された綱領は次のようなものである。原

文作者はロバート・オーウエンである。

1) 神は万有の祖である。2) 人類は皆同胞である。3) 霊魂との交通及び天使の守護がある。4) 人間の霊魂は死後も存続する。5) 自己責任の法則が存在する。6) 地上の全ての善悪の行為に対し死後につぐないと応報とがある。7) あらゆる霊魂は向上する。

日本のスピリチュアリストの先駆は浅野和三郎*5である。彼は海軍兵学校の英語教師であり英文学者としても著名であったが、彼の妻が優れた霊媒としての性格をあらわし、彼女の守護霊である戦国時代の女性の人生を語らせた「小桜姫物語」を出版した。*7 縁があつて大本教に入り、教祖の出口なおに重用され、教祖の神霊からの自動筆記にあたる「お筆先」を解説した。やがて大本教が国家による弾圧を受けた後、欧米に渡り、勃興していたスピリチュアリズムを内部に入り調査した。帰国後の大正末期の1921年に日本の心霊科学研究会を発足させた。亡くなる3年前の昭和9年(1934年)に発表した「心霊科学から神霊主義へ」*5の中で日本流の神霊主義の指導理念をまとめている。その抜粋は次のようになる

1) 心霊現象は科学的事実である 2) 各自の個性は死後に存続する。3) 死後の世界は段階がある 4) 各自の背後には守護霊がいて本人と不離の関係をもつ。5) 自然霊が存在する 6) 最高の霊が宇宙神 7) 全宇宙は物心一如の大生命体である。

心霊現象のブームはベルクソンの死前後から急速に消えていった。世界は第2次大戦と戦後の米ソ対立の長い危機時代に入った。経済と科学技術万能の時代になり、無神論が世界を覆いつくした。しかし細々と心霊現象探究は続いていたのである。そして21世紀に入った今、新たな変化の時代を迎えているようにみえるのである。それを第2部で報告する。

第1部完

参考文献

- *1 多くの翻訳があるが、今回用いたのは平凡社ライブラリー原章二訳。アンリ・ベルクソン精神のエネルギー
- *2 近代スピリチュアリズムの歴史 三浦清弘 講談社 2008/4
- *3 ヴィクトル・ユゴーと降霊術 稲垣直樹 水声社 1993/3
- *4 近代スピリチュアリズム百年史 アーネスト・トンプソン著 桑原啓善訳 でくのぼう出版 2011/2
- *5 心霊科学からスピリチュアリズムへ 神霊主義 浅野和三郎 でくのぼう出版 2003/1 復刻再版
- *6 霊の探究 近代スピリチュアリズムと宗教学 津城寛文 春秋社
- *7 小桜姫物語—霊界通信 浅野和三郎 2003/7 復刻再版
- *8 永遠の大道 G・カミンズ著 浅野和三郎訳 潮文社 H22/11 復刻再版

巻末註 これまでの私の三水会でのベルクソン紹介経過

ベルグソン紹介 第1回 笑いについて（2004年1月）

ベルグソン紹介 第2回 ベルクソンの「いのちの理論」

“創造的進化—エランヴィタール”について（2007年7月）

ベルクソン関連 現代物理学と新しい哲学（2009年10月）

ベルグソン紹介 第3回 ベルクソンの精神についての哲学

「物質と記憶」を読む（2010年10月）

ベルクソン関連 「無」—逆転のシンボル（2012年5月）

ベルグソン紹介 第4回「道徳と宗教の二源泉」が現代に残したもの（2014年1月）

ベルクソン紹介 第5回「精神のエネルギー」2016年3月と5月

4 ベルクソン紹介 第5回

「精神のエネルギー」を読む その2



三水会 2016年5月
野口幹夫

<承前> 三水会には心霊現象の経験者がたくさんおられた。

三水会で前篇の報告をしたところ皆様から様々なご感想と質問をいただいた。

中でも心霊現象を自分も経験していると発言された方が3名おられたのは予想しないことであった。臨死体験で少年のころ仲間に促されて川に飛び込んだら、深くに沈み込んでもう駄目だと思った一瞬 人生の思い出がパノラマのように頭をよぎった（O氏）38度の熱をおかして仕事を続けたあげく人事不省となった時、頭から天国に登っていく夢を見た。

（D氏）昼間の交差点で叔父と出合って話をしたと思ったらそれは現実ではなかったが、その直後に叔父は亡くなっていた。（MS氏）甥はスプーン曲げができた。大学に入ってやめたので理由を聞いたら「あれをやると大変体力を消耗するから」といっていた。（M氏）などであって、普段はそのようなことは話されないが、聞いて見ると不思議な経験をなさっている方がすぐそばに居られるのだ。

また深いご質問をいただいた。

テレパシーはやがて科学で証明されると思うか？（Z氏）

哲学は、人はどこからきて、何であって、どこへ行くのかにこたえなければならぬ。（O氏）

AI 囲碁が名人に勝った。コンピューターに直観を取り入れたと聞いている。直観とか第六感というものほどのように働くのか。（K氏）

量子の属性が遠く離れた別の量子に、その属性が瞬間的に移動するテレポーテーション現象が観測され確認されている。その伝達は？（M氏）人間は気を発することができる。受けとめる側の気が必要だ。（Z氏）などである。

これらの質問に対して、今回の調査で答えうる仮説を作り上げることができた。それはこのレポートの終わりにまとめて述べたい。

第5章 ベルグソン亡き後の動向

5-1 「精神のエネルギー」講演についての評論

復習的にベルグソンの「精神のエネルギー」に関する日本人の評論を二つ紹介する。

1-1 小林秀雄の評論 *1

小林秀雄は昭和初期の日本を代表する知識人である。彼はベルグソンを深く学んだ。彼は全集を読んだ哲学者はベルグソンだけであったといい、いつの日にかベルグソンについて書きたかったが、「無学を乗り越えられなかった」のでついには書かなかったとも言っている。そんな小林が、よりによってこの「精神のエネルギー」を取り上げて詳しく紹介した講演がある。昭和50年に行った「信じることと知ること」だ。

「私が大学に入った頃、ベルグソンの念力に関する文章を読んで心を動かされたことがある。1913年ベルグソンがロンドンの心靈学協会に呼ばれて行った講演で、その大体のところは今でもよく覚えているので、これからお話する。」という前置きで講演は始まった。

「ベルグソンが或る大きな会議に出席していた時、たまたま話が精神感応の問題に及んだ。或るフランスの名高い医者も出席していた。一婦人がこの医者に向って話をした。この前の戦争の時、夫が遠い戦場で戦死した。私はその時、パリにいたが、丁度その時刻に夫が塑壕で斃れたところを夢に見た。それをとりまいてる数人の兵士の顔まで見た。後でよく調べてみると、丁度その時刻に、夫は夫人が見た通りの恰好で、周りを数人の同僚の兵士に取りかこまれて、死んだ事が解った。

ベルグソンは実に簡明にこう考えた。

この光景を夫人が頭の中に勝手に描き出したものと考へることは大変むつかしい。どんな沢山の人の顔を描いた経験を持つ画家も、見たこともないたった一人の人の顔を、想像裡に描き出すことはできない。見知らぬ兵士の顔を夢で見た夫人は、この画家と同じ状況にあったでしょう。そうい

う夢を見たとは、確かに精神感応とよんでもいいような、未だはっきりとは知られない力によって、直接見たに違いない。そう仮定してみる方が、よほど自然だし理にかなっている、と言う考えなのです。

ところが、その話を聞いて、医者はこちら答へたという。昔から身内の者が死んだ時、死んだ知らせを受取ったという人は非常に多い。けれども、その死の知らせが間違っていたという経験をした人もまた非常に多い。つまり沢山の正しくない幻もあるわけです。どうして正しくない幻の方をほっておいて、正しい幻の方だけに気を取られるのか。たまたま偶然に当たった方だけを、どうして取り上げなければならないか、と答えたというのです。ベルグソンはその講演で、こう言っています。一流の学者ほど、学者は自分の厳格な学問の方法を固く信じているから、その方法のとりこになってしまう。その医者は夫人の見た夢の話を、正しいか正しくないか、つまり夫人が夢を見た時、確かに夫は死んだか、それとも、夫は生きていたかという問題に変へてしまうと言うのです。夫人の経験の具体性をそのままに受取らないで、これを果して夫は死んだか、死ななかつたかという抽象的問題に置きかえてしまう、そこに根本的な間違いが行なわれていると言うのです。

経験科学と言う場合の経験は、科学者の経験であって、私達の経験ではない。私達が、生活の上で行なっている広大な経験の領域を、合理的経験だけに絞った。そしてこれを計量というただ一つの点に集中させた狭い道を一と筋に行った。そのことで、近代科学は非常な発達を実現できた。しかし人間精神の動きの微妙さは計量計算には到底ゆだねられない。そこに精神的なものの本質があるといつても、常識にそむくまい。」

ベルグソンが記憶の研究にはいつていった頃、心理学の方でも、意識心理学から無意識心理学への転換が行なはれる機運が来ていた。唯物論の上に立った自然科学の方法だけを頼んで人間の心を扱う道は、どうしてもうまく行かなくなったという事です。大昔の人達は、誰も肉体には依存しない魂の存在を信じていた。これは仮説を立てて信ずるという点で、近代心理学者達と同格であり、何も彼等の考えを軽んずる理由はない。精神より物質を優位に据える仮説では、いろいろ不都合が生ずる事になるなら、精

神は、無意識とも呼ぶ近付き難い、謎めいた精神的原理の上に立つと考へ直してみるのもいい事だ。」と紹介している。

小林は念力などの超自然的現象に対して、今テレビが代表する世の知識人は、事実を事実として素直に受け取ろうとはせず、どこか嘲笑的態度をとるのが一般であり、現代の通念にしたがっていないことはすべて理解できないとして拒否するが、そのような態度は、彼らがどこか根本的な反省を欠いているのだと述べている。

1-2 藤田尚志の論文*2

藤田尚志氏は京大文学部からフランス リールに留学した若手のベルグソン研究家である。現職は九州産業大学の哲学准教授だ。彼はこの講演について次のように論評している。

「この第3論文は、ベルグソンが心霊現象に正面から取り組んだ唯一の論文であるというまさにその事実のゆえに、論文集そのものがマージナルな扱いを受けている。現在ベルグソン研究者のある学者はこれを空理と呼び、彼の一時的な気の迷いか、非合理的な恥部として不問に付すという空気すらある。」といている。

藤田氏は、この論文を書いたベルグソンの意図をこのように解説している。

まずベルグソンは心霊現象を「自然科学の対象と同じ種類のもの」とし、しかしそれは物理現象とは違う精神現象であるから1回1回ごとに特異な形で現れることに注意して、それにあつた研究方法をとらなければならない。精神感応であるテレパシーは、共感と表裏の関係にあるという本質も指摘している。物理現象は主観を挟まないのとの違いである。このように解説しつつ、ベルグソンの最後の大作「二源泉」の終わりの部分を援用して、彼の意図するところを普遍化する。

すなわち

哲学とは思考の習慣的な方向を逆転することである。

哲学は人間の条件を超出するための努力でなければならない。

物欲の大地に縛られた人類の目を、精神性の天空に向ける。

神秘科学 心霊科学によって人類自体を転換させる。

それらのことは、この領域の調査で得られたことを徐々に時間をかけて伝えることによってしかなされない。それが抽象的で力のなかった来世信仰から、生きた実効のある現実に変えていくことができるのだ。と述べている。

ここで紹介した二つの評論はベルクソンの意図を正しく受け止めて、これからの心霊科学の発展を重要なものと述べている。

しかし心霊科学の研究は、彼が期待したようには進まなかった。神を信じる者も信じないものも、また死後のいのちの存続を信じる者も信じないものも、同じ土俵で、その現象に率直に向き合い、研究の方法論から探っていくというあるべき研究体制は、どこにも、そして少なくとも現在までは生まれなかった。

第6章 超心理学研究*3

ベルクソン以降心霊研究は、統合的には進まず、二つの流れに分かれ、お互いが無視する不毛の分裂の空白が生まれたまま展開したのである。

一つの方向は、超常現象あるいは心霊現象は存在することは認めながら、霊界からの作用が介在するとの考えは拒否し、人間の知られざる能力がそれらを起こしているのだと想定し、もっぱら生きた人間がもつ超能力を探ろうとする超心理学である。人間だけが相手だから、科学から外れない追求法さえ厳守すればアカデミズムの領域で生き残れた分野だ。

6-1 超感覚的知覚 (ESP) や念力 (PK) の調査研究

1876年に実験超心理学研究が英国 SPR の設立とともに組織だって調査研究が行われ始めたことは第1部で述べた。その後研究の展開の主力はアメリカに移る。SPR のアメリカ本部 ASPR が活動を始める。初めは SPR

の活動と同じく、霊媒なる特殊能力者による死後霊との交流に関心があり、その記録の解析が続けられたのであるが、ハーバード大学からノースカロライナのデューク大学に拠点が移った 1927 年から J・B・ライン教授によって ESP 実験心理学が始まった。

その特徴は一切の霊媒を排除して、普通の人間の超能力の発見を数理統計に沿って発見しようとするものである。科学技術がますます世界を支配していった 20 世紀の風潮は、もはや霊媒による死後霊との交流を研究の対象とはできなくなったのである。

ライン教授の実験は、人間が持つかもしれないテレパシー能力を、普通の人間同士の間で発見しようとするものだ。統計処理ができるように簡単なシンボル画を画いた 5 種類のカードが用意される。実験される二人の普通の人の一人がある部屋で任意に選んだカードの絵見て、その絵柄を、離れた別の部屋にいるもう一人に伝えようと念ずる。受け手は伝えられたと思いつつその絵を選ぶ。5 枚あるから偶然なら 20%の確率で当たる筈だ。しかし数多くの実験から成功する確率は数%上回るのだ。その後も疑り深い反論者が絶えないのでこの実験法はどんどん複雑になっていったがどの方法でも、あり得ないと考えられてきたテレパシーは、一般の人たちの間でもわずかながら存在するとの統計的結論が出るのだ。

さらに被験者をランダムでなく、音楽学校の生徒を対象にするとか、芸術的直観的センスの豊かな人間同士にすると、その確率は上昇するという知見も得られたのである。

しかしその伝達内容は統計処理ができるように用意された図形がシンブルなものであり、被験者にしても手当をもらって実験に協力するだけなので、伝達に必死になるようなモチベーションはない。ベルクソンの演説で取り上げられたような死に臨む戦場から留守宅の妻への必死の思いといった元来精神感応のエネルギーが発揮する環境のことは何も配慮されることはなかった。またそれがいかなる媒体によって伝達されるかの仮説が立てられることもなかった。

人間の未知の精神力として、遠隔の物体に対して作用する念力というも

のがあると知られ、それをサイコキネシス（PK）と名付けられた。例のスプーン曲げとか物体移動といったものだ。20 世紀前半までは霊媒者たちは、暗室でテーブルを宙に浮かせたりして、盛んにこの PK を発揮したが、20 世紀になって有力な霊媒を囲むような会が世間の非難の中で行われなくなっただけにかげを潜めた。

テレビ時代に入り登場したユリー・ゲラーのスプーン曲げが世界的に有名になった。それに刺激されて、スプーン曲げなら自分でもできるという若者が出てきた。スプーン曲げも不思議な能力であるが、その他にも不思議な PK の類が否定できない能力と認められているが、その本質を究明するところには至っていない。PK 能力者が公開の場の実験に協力的ではないからである。この種の能力発揮は共感の雰囲気の中では可能なのが、疑いの目があれば萎縮してしまうという性格があるからだ。

6-2 深層心理学*4*27*28

人間の精神のエネルギーという観点に、別なアプローチが 20 世紀の前半に生まれ始めた。

ベルクソンは、意識の本質は今を生きるためのものであるため、必要でない記憶や特殊な感覚は意識によって抑え込まれてしまうという本質を先の講演で指摘している。まさにそのことを探索したのがフロイトやユングのいう深層心理学である。ユングはそれを「無意識の領域」の心理としてその解明に力を注いだ。

無意識の記憶は個人が幼い時に体験したものもあるが、さらに個人誕生以前に祖先から受け継いだ記憶がある。それは個人を越えるものであるためユングは「共通無意識」と名付けた。無意識の心理には理解しがたいパワーがあるとみている。彼が「共時性シンクロシティ」と名付けた現象で、さきの PK 現象のように空間を隔てて起こす力を持っているとし、その現象もこの無意識領域の起こす「共時性」の出来事と説明した。しかし名付けただけでそれ以上の解明はないにもかかわらず、名前が付いただけでいろいろとわかったように使われている。たとえば前節で紹介した V・ユゴ

一のテーブルタッピングによる異界との交信もユゴアの深層心理がなせる業であるとし、異界との交流を否定するための説明として使われたりするが、それなれば深層心理がどのように外界に働きかける力となっていくのかの解明はない。

6-3 トランスパーソナル心理学*8*9*10*11

超心理学は、人間にはテレパシーの能力がある程度存在するという成果をあげたに留まってそれ以上は進展しなかった。しかし心理学上の展開は、無意識・深層心理の発見とともに、さらに自己の奥に沈潜していく方向で展開した。

1960年代から70年にかけて、アメリカ西海岸を中心としたニュー・サイエンス運動のなかで、心理学もこれまでの西欧流の分析から東洋思想に見られる超越・統合への視点をもったものへと展開した。「トランスパーソナル心理学」である。自己を越える心理学と訳していいのかもしれない。自己を見直すという点では同じ線上に「人間性心理学」と分類される心理学もその直前にうまれている。これまでの心理学が客観分析を重んじたのに対し、この両者とも人生の「自己実現」といった目的論的学問であって、その達成のための心理探究とその手法の開拓に向かったのだ。そこに親和性のあるインド思想、仏教、特に禅の思想に接近していった。ちょうどニュー・サイエンスの旗頭「タオ自然学」を著したフリッチョフ・カプラがインド思想の中に素粒子運動の類推を見出したように。

トランスパーソナル心理学を理論づけたケン・ウィルバーによってその本質を説明しよう。それは物質から生命そして心へと通っている1本の柱がある。それを「スピリッツ」が推進するとする。進化とは働いているスピリッツだとする。進化には構造がある。進化するすべて実在は、ホロン構造をなす。ホロンとはそれ自体が全体であり同時に何か他の全体の部分であることを特質とする。ホロンはスピリッツにより、常に自己超越をしつつ進化するが、その時は常にその前のものを含む。その仕組みが働くス

ピリッツの核心だとする。

その進化論の上に進化の最上階は意識の変容を伴う神との一致、コスモスとの一体化だとする。この段階にはさらに細かい段階を述べるが、その定義はインド思想用語だ。その高い段階を踏破していくためには默想的修行、瞑想体験を経ていかねばならないとする。我々にはおなじみの禅の世界に入り込むとしか見えない。修行によって究極の段階に達すれば、生も死もないコスモスに溶け込むのだという。だから死は問わないのだ。そして全過程が魂の成長を目指すとの根本理念があるので、その先に転生説が繰り込まれる。シュタイナーの人智学ともつながっていくのだ。

日本でもこのトランスパーソナル心理学は流行している。先に希望を持ってない社会の中で、心の癒しと自己変革をもとめる人たちが増えているから、高価な参加費をとって次々にトランスパーソナル心理学の実践ワークショップが開かれている。心理学とはいえ宗教活動に近い。

トランスパーソナル心理学も、シュタイナーの人智学も、そして禅宗も共通するものは宗教的でありながら、無神論で、人間の修行努力、それも何度も輪廻転生を繰り返して行って覚者になっていくという自力本願、人間至上主義なのである。

第7章 20世紀の新興宗教

心霊研究の流れの今一つは、アカデミズムの世界には見切りをつけて、死後のいのちの存続を前提にして、心霊・神霊世界を信じて探索しようとした分野だ。

7-1 世界スピリチュアリスト連合*5*6*7

第1回の報告でのべたイギリスのスピリチュアリスト連合 SNU は第2次世界大戦後も活動を続けた。この運動の中心には霊媒たちの存在が不可欠であったが、霊媒たちは怪しい存在として迫害され、投獄された。連合は霊媒たちの法律的な保護活動や、霊媒たちのレベルアップのための教育

に力を注いだが、しかし発展はほとんどなかった。

欧米はキリスト教国であるので、スピリチュアリズムはキリスト教に接ぎ木された。1931年霊媒の中に福音伝道中のイエスと会話した聖書学者が霊媒 D モーイスに現れた。彼女を中心にキリスト教スピリチュアリスト連盟が生まれ米英のスピリチュアリズムはそれが中心となった。その信仰宣言はオーウエンの宣言にイエスキリストを主とすると加えただけで基本は同じである。存命中のイエスやその仲間と語り合う霊媒はこのほかにも多くいたのである。これらも宗教団体としては衰退している。

唯一それらと同じ根から生まれたものの中で「エホバの証人」は元気だ。現在われわれが街で熱心に布教活動をする信徒を見かけるが、この信仰団の持つ信条はキリスト教的スピリチュアリストのそれに近い。イエスを三位一体の神としたカトリックの教説を否定し、神エホバとその国から派遣されたイエスを信じる。これは 1850 年に大ベストセラーとなったスピリチュアリズムの元祖 A・J・デイヴィスの「自然の原理」で述べたイエス観とおなじである。「エホバの証人」の最大の特徴は終末思想をもち、世界の崩壊の時、救われる人の召集という危機感を与えて教勢を拡大した。

7-2 日本の 20 世紀前半の新興宗教*20

第 1 回の報告でも述べたように日本でも 19 世紀から 20 世紀の前半にかけて大本教などの神霊主義の宗教が生まれた。それから多くの分派が生まれたが、戦時体制の強化で国家に抑圧された。

戦後信仰の自由を得て活発になった宗教団体がいくつもあり、今も身近に熱心な信仰者たちがいる。創価学会、世界救世教、大山ねずの命神示教会などである。これらは戦後の復興とそれに続く高度経済成長期に社会の底辺で勢力を拡大した。この時期社会は豊かにはなっていたが、それだけで人は満足しない。かえって真の生きがいはどこにあるのかを探す人も増えそのエネルギーを吸収して教団を伸ばした。

創価学会は人間日蓮を本佛とし、法華経以外は真つ向から否定する。こ

れを国教とし国立戒壇の建設をめざす。先祖供養もしないし靈的なものは一切なかった。(最近一部方向転換があつて、創価学会経営の靈園ができたようだ。) 創価学会の組織で活躍すれば現世の幸福が約束される。800 万人を超える信徒組織をもち政治にも深く関与している。

立正佼成会や妙智会も同じ日蓮系の教団だ。創価学会との違いは先祖供養を重んじ、戒名の与え方の改革(夫婦平等)をして仏教に親しんだ人の違和感を減らした特徴をもち創価学会と対抗した。

世界救世教は、岡田 茂吉(1882 年-1955 年)が創設した。貧困病苦の中、大本教に入信。自らの館山山頂における神秘体験をもとに、全人類の病、貧困からの脱出、新文明世界(=地上天国、理想世界)を創造することを目指した。新文明世界は3つの活動理念「精神性」「美」「自然力」を培い発展させることによって達成されると説いた。自然農法の創始者、美術の支援者として MOA や箱根美術館などを創設した。この教団の特徴は浄霊と呼んでいる「手かざし」による病の癒しである。国内外約 90 カ国以上に教勢を広げており、合計 100 万人以上の外国人信徒が「浄霊」を行っている。分派も多い。(その中には死後の世界を受け入れているのもあるようだ。)

これらには共通した特徴がある。現世的なのだ。死の先を問わない。垂直軸の先は日蓮であったり法華経であったり、岡田茂吉の生き方であったりするが、主眼は信徒のつながりという横軸である。創価学会の組織で人々は生きがいを得た。救世教の浄霊でお互いの健康を願い合った。その実践する人生教訓は健康的で明るい。ただし信者の望みも変化してくるので、先祖供養や死後の世界への配慮をする傾向が出始めている。

7-3 20 世紀後半の日本の新宗教

20 世紀の後半になると、超越世界からの影響を正面に出した新宗教が始める。

GLA という穏やかな新興宗教がある。オーム真理教や幸福の科学の先輩だ。霊的離脱を経験して魂の輪廻転生と成長を確信した高橋信次とその娘高橋佳子が「魂の学」という素朴な原理で信徒を集めた。自己の確立と世界の調和を説き、世界の危機感をもたないので穏やかな展開ながら信徒を増やしている。

オウム真理教は 20 世紀の最後の落とし子だ。超能力を修行によって得たと称した麻原彰晃が魔神として登場、大学を回って理系技術系でありながら社会では先が約束されない見えない不安の若者に現世での恐ろしいアクティブな活躍の場である日本転覆、改造の夢を与えた。「宗教も科学だ」と語る麻原には超越者は自分しかない。

「幸福の科学」も同じ時期だ。教祖の大川隆法が異界との通信「チャネリング」によって諸宗教の教祖と直接語り合い、自らがエルカンターレなる神と自覚宣言した。彼の指導のもと、仏法真理の探究・学習・伝道によって「この世とあの世を貫く幸福」と地上ユートピアの建設を目指している。右翼的主張をもって政治への参加を目指している。

霊界からの信任をもって教祖の権威とするのだが、教団の中で謙虚さを失い自らを神格化する例が多い。カリスマ一代限りに終わることになるろう。

第 8 章 21 世紀のスピリチュアリズム

8-1 2012 年アセンション騒ぎ*15*16*17*18*19*21

19 世紀に世界を風靡した霊界通信が、20 世紀の終わりころから新たに復活し始めた。今回の発信元は宇宙時代の知見を反映して宇宙からだ。太陽系だけでなくプレアデス星雲などからの霊界通信がある。

マッシュブック*21 という長く続いている霊界通信がある。17 歳で自動車事故にあった息子からの霊界メッセージが 14 年後から母の耳に聞こえ

始めた。オバマ大統領の選挙を支援し、それを阻止しようとするイルミナティなる金融資本の陰謀を攻撃するなど世界の現状への強い関心がある。彼が述べるところによると、マシューはひとりではなく、一群の地球工作部隊を作って、地球の精神レベルの向上をはかる役割を持っている。それをアセンションとって 2012 年に大きな節目を迎えるといった情報を語った。

この 2012 年アセンション説は他の人々も同調した。

東大物理を出てソニーの半導体に 10 年勤めたという坂本政通はアメリカのモンロー研究所で体外離脱を習得した。ヘミングという二つの周波数の音源をイヤホンで聞きながら訓練すれば、高次の変性意識状態に入り、体外離脱によって、自分の過去生をしり、5 次元空間の地球外のさまざまな知的生命体とコンタクトし情報を得ることができる。地球外の知的生命体からの情報で、地球は 2012 年大きなアセンションを迎え、天変地異が起き地球はより高い存在へと突入するという。

この 2012 年アセンション説は 2008 年ころ沢山の出版物で紹介された。経営者の船井幸雄、人気作家よしもとばななや、NHK まで「2012 年文明が終焉する」という本を出した。ローレンス・E・ジョセフの著作でインカの暦と宇宙観測などから 2012 年の危機を立証したという。

2011 年は東日本大震災で原発が崩壊した。これをもって予言が当たると信じた人もいたかもしれない。しかし当の 2012 年の冬至は何事もなく穏やかに過ぎていった。

この説を熱心に支持した人に共通することがある。メッセージの発信元が遙かな宇宙であり、死後の輪廻転生や、死後の魂がグループを作って地球に働きかけていることを主張するのだ。

その多くは講座やグループ学習の会を作って熱心に会員を勧誘している。新宗教の現代版といった趣がある。2012 年騒ぎで、それが過ぎた今勢いをうしなったかもしれないが。

8-2 真如苑*20 と本願寺大谷暢順法主 古典仏教に靈的息吹

21世紀になって在来仏教の分野でも目覚めがあった。その一つとして急成長している新興仏教団が真如苑だ。創立は古いが、急成長の原動力は女性で真言宗醍醐寺派の大僧正位をもつ伊藤真聰氏だ。バブル崩壊の直前に父から教団を引きついで。国際的で華やかな活動パフォーマンスをして教団の勢いを伸ばしているが、教団のホームページを見る限り真言宗そのもので、その飛躍の核心が見えない。しかし宗教学者島田裕己氏の調査によれば、その特徴は霊能者群の個別接心にある。巨大な建物は病院の個室の集まりのようで、ここに霊能者が入り、「接心」を受ける信徒に会う。霊能者は入神して霊言を与える。それはシャーマンのようなおどろおどろしいものでなくカウンセラーのようだ。霊能者も修行さえすれば誰でもなれる。創価学会のような組織仲間の結束といったものはまるでない。個々に霊能者を介して縦につながるだけだ。ここに時代の新宗教たるポイントがあるのだろう。

日本最大の仏教宗派のひとつは浄土真宗だろう。大半は眠り信徒であろうが、それでも本願寺は親鸞の直系の聖人が法灯を継ぐ最大の寺院だ。その25世法主の大谷暢順が1000円本を出した。本の題は「人間は死んでもまた生き続ける」*23 帯広告には「この世限りの命だ」と思っていると損をする」とある。全国紙に1面広告を出したのだから驚く。

内容は古い輪廻転生から説き起こし、釈迦は自らの悟りによって恐ろしい輪廻から抜け出した。しかしそのような悟りは釈迦にしかできない。凡人には到底かなわない。救いは阿弥陀仏だ。阿弥陀仏は釈迦も含めたすべての如来の上に立つオールマイティの仏で、慈悲深い。彼に頼ればその力で極楽浄土にうまれることができる。という親鸞の教えを再び確認しているだけなのだが、それだけならば誰も見向きもしないだろう。この本のインパクトは本来本願寺の法主の次男として生まれた彼が、それゆえに受けた冷遇に反抗して、僧職をいったんは抜け出し、フランスに貧乏学生として留学し、フランス文学に生きようとする。しかしこれにも挫折する中で徐々に浄土真宗に目覚めていく。帰国後京都外大に職を得て、東本願寺の内紛分裂に会い、東山浄苑という納骨堂の理事長職を押し付けられたが、

その間対立する僧侶たちからお前はまだ修業が足りないと監禁されたり、という赤裸々な経験の告白と、心の遍歴の中から、阿弥陀仏浄土というあの世の再発見物語だから説得力があるのだ。新聞広告のキャッチフレーズ「人間は死んでもまた生き続ける」は率直で社会にインパクトを与えたに違いない。

この二つを紹介したが、それは古くてそのままでは 21 世紀の時代には受けいられない仏教団が、霊界との結びつきを再確認するか、強化することで、時代の要請にこたえ、それが成功している。

第 9 章 臨死体験

立花隆と NHK の共同ドキュメンタリー「臨死体験」は 1991 年に放映され、今やその言葉を知らない人はいない。しかしそれは 20 世紀後半の新しい知見なのだ。19 世紀の終わり心霊現象を科学的に調査研究しようとした英国 SPR は 6 つの分科会を作ったが、テレパシーや催眠術、サイコキネシス、霊界コンタクトなどを取り上げたが、臨死体験の項目は無かった。1946 年の英国映画「天国への階段」(A Matter of Life and Death) は今から見れば臨死体験の物語であるが、当時は奇抜なファンタジーとして受け止められ、それが広範に経験されている深刻な現象とはみられていなかったのである。

1975 年に発表されたキュープラー・ロスの「死の瞬間」*24 は、死に向かう患者のこころのケア—の問題を訴え世界の注目を集めたが、そこには臨死体験は触れられていない。しかしその後、その延長上で彼女自身が体験した臨死体験を発表した。これをきっかけに 1977 年にはアメリカで臨死現象研究会が発足した。21 世紀になって欧米諸国で、広範囲の調査がおこなわれ、それが稀なケースでないことが明らかになった。

臨死体験の内容は民族の特徴や宗教によって異なるが、体外離脱、トンネルを越えて光の世界へ、心の安らぎを経験したといったことが、多く共通している。

臨死体験は、脳が崩壊する時に起きる生理学的な変化が誘発する幻覚だ

と科学信奉者は主張するが、その証言を幻覚と片付けるにはあまりにリアルで迫力があるのだ。

私自身にもこんな経験がある。24歳のころ結核治療で肺葉切除手術をうけた。全身麻酔で3時間の手術だった。終えて自室に戻されて1時間後に麻酔が切れて、激痛と呼吸の苦しさに目覚めて、3日3晩の厳しい時間を過ごした。ずっと後で気が付いた不思議な思い出があるのだ。ふと気が付くと自分はテラスの暖かな日差しの中のガランとした部屋で横たわっていて、えも言えぬ良い気分だった。宙に浮いて寝ているようだ。近くで女性が床を洗いながらしゃべっているようだった。そのまま、また眠ってしまった。そんな夢だ。

それは夢のようだが夢と違うリアルさがあった。大抵の夢ははかなく忘れるが、その記憶は今も鮮明なのだ。どうやらそれは手術後まだ麻酔は効いていて、身体はまだ物体としての肉体のまま、痛みを感じる脳も寝たままの状態、それらとは別になった魂が、ふと気づいた手術室の出来事で、手術が終わって看護婦さんたちがそばで床清掃していた風景だったとしか考えられないタイミングなのだ。リアルで気持ちがよく、安らかだったという点は、多くの臨死体験と共通している。

第10章 芸術を先頭にした社会的風潮の変化

21世紀になって、最近身近に感じる異変がある。その風潮を感じさせてくれるのは芸術家たちだ。

東日本大震災のあと東北応援ソング『花は咲く』が繰り返し流れた。人の心をつかんだ不思議な歌だった。

真っ白な 雪道に 春風香る 私は懐かしい あの街を思い出す
叶えたい夢もあった 変わりたい自分もいた
いまはただなつかしい あの人を思い出す
誰かの歌が聞こえる 誰かを励ましてる
誰かの笑顔が見える 悲しみの向こう側に

花は 花は 花は咲く いつか生まれる君に
花は 花は 花は咲く 私は何を残しただろう

この歌は心にしみる。それは明示されなくとも、これが亡くなった人達が、あの世から語りかけ、それにこの世から答えるという応答歌になっているからだ。大勢の人が無念の死を遂げた。そのままでは報われない。その思いを代弁しているのだ。

2015年正月に封切られた「母と暮らせば」は、山田洋次監督が作家・井上ひさしさんの遺志を継いでつくられたものだ。2004年に映画化された「父と暮らせば」が広島で、「母」が長崎での原爆死体験の物語だ。ともに無念の死者が残した家族のことを案じてこの世に現れる。山田監督の「男はつらいよ」48作はじめたくさんの作品には亡霊は出てこなかった。

死後の世界や、死者との交流を描いた映画作品を調べると、21世に近くなって次々に現れているのだ。米国映画「奇跡の輝き」ロビンウィリアム主演 1998 是枝裕和監督作品「ワンダフルライフ英語名 After Life」が 1999年 浅田次郎の小説「椿山課長の7日間」は 2001に新聞連載小説で 2006年映画化、三谷幸喜の落ち武者の亡霊が法廷にでる「愉快的金縛り」が 2011年といった具合だ。これらの映画作品は、ホラー映画ではなく、日常的な話題の中で、死後の世界との交流を描いているのである。

今、普通の人たちの多くが、死後の世界の存続を疑わなくなったという背景がなければ、これらの映画が興行的に成功するわけではない。

第11章 結び

ベルクソンが亡くなった後、科学技術の目覚ましい進歩で、人間のすべての悩みは科学が解決してくれると人々は信じるようになった。人は無神論者となり、神は死んだ。その空白を埋めるように IT の技術が入り

込んだ。その IT で武装したお金は、人間のコントロールを受けず、逆に人間を支配する時代となった。お金が魔神となった。

ベルクソンが人間の進化に望みをかけて、そのキーを握ると期待した精神科学は、このような時代のために、進むどころか関心も薄らいでいった。探究の一つは心理学の分野で生き残ったが、科学主義の限界を露呈して、テレパシーなどの隠された能力の発見はなかった。それを求めた心理学的は行き詰まり、精神の内面性の探究、目的論的追求に向かい、東洋のヨガや禅に結びついていった。西欧には新鮮だったが人類全体には新味はなかった。

一方、霊界の探索は、20 世紀に途絶えてしまった。この時代に成長した宗教団の特徴は、世俗的な組織化であり、霊的なものは避けたという珍しい特性を持っている。

21 世紀に近くなって霊界の探索が再開された。19 世紀と違った特徴がある。一つは霊界が宇宙規模となったこと、名もない個人が霊媒であった 19 世紀と違って、霊能者と称する人達の知的レベルが高く、教団の主宰者となり、さらには自らを神と宣言するような目立つ存在であることが特徴だ。残念ながらそのメッセージはこれまでの各種宗教がいったことの寄せ集めでしかない。2000 年前のイエスと比べるとその違いがわかる、イエスも父である神のメッセージを仲介したが、本人は終生「人の子」といい謙虚で、教団も作らなかつたし、お布施も受け取らなかつた。しかしそのメッセージは人類を感動させる。*22

結論的に言えば、ベルクソンの期待に反して、この 100 年人間の未知の能力も発見されず、霊界の探索も納得できるものは見つからなかつた。しかし見つからないというのはその事実がないのではなく、それを解明する能力をいまだ人類は持てないでいるのだと見るのが、正しい問題認識であろう。精神に直接結びつくであろう科学の知見が全く足りないのだ。12 章に詳しく述べるが、重力子、重力波、特に生命重力波の科学は、これからまだおそらく数十年先でないとは出てこないであろう

う。その手段を手にしたとき人間は初めて精神に関する本質にせまることができるだろう。

しかしベルグソンの時代には全く見えてなかった臨死体験の知見は、思いがけず正面からでなく裾の方からの風穴を開けてくれた。それは少なくとも死の先に世界はあるという、かすかな、しかし身近に広まっていく便りをもたらしてくれた。

そのこともあって、21世紀にはいつて、よく見れば、どこか人間のこのころの空気が変わったところが生まれている。その変化の先頭に立つのは理論家でも宗教家でもない芸術家だ。彼らは人が死の先の世界の存在を認めても、けっして恥ずかしくないのだと主張し始めた。

絶対と思いこんでいた科学技術の限界も見え、物神として人を支配するお金も嫌われるようになった今だからこそ、逆説的な人間の大進歩かもしれない。これがマシューのいうアセンションかもしれない。

100年の間見失っていただけであった普遍的な人間の思い「人間は死で終わりではない」という思いを再び人類は手にしつつあるのだ。今度こそはそれを失うことなく、安心して肉体の終わりを迎えたい。きっと、希望を持ってその時を迎えるものには、特別な才能がなくても、つまり誰にでも、その驚くべき世界は門を開くであろう。それがどんな広がりがあるのかを生身の人間にも見えてくるのは、100年後を待たなければならぬのだとしても、いまはそれで十分なのだ。

第12章 魂とは何か、そしてその行方は、—私の総合的仮説—

始めに戻って、いただいたご質問に答え、また「結び」で述べた将来の期待を敷衍する私の総合的仮説モデルをまとめてみたい。

その前にこのモデル構築のために、まず最新の物理学の知見をおさえておきたい。20世紀の半ばまでは究極の知見と考えていた素粒子論が、実は電磁体である素粒子群の知見にとどまっていることがわかった。い

まは仮にグラビトンと名付けられている重力にのみ反応する未知の素粒子は、まだ発見されておらず、発見の手段もない。そのグラビトンと総称される重力子は、例えば電子・陽子・中間子などに対応して細分化される各種の粒子群に展開されるであろうが、それはまだ仮説にもなっていない。宇宙観測で発見されたダークマターはこれらを指すものと考えられるが、この中味が発見されるのは22世紀まで待たなければならないだろう。

私の推論モデルには、その未発見の重力子素粒子群と、それらが発信しかつ受信する微細重力波の存在を予想している。それは電磁的素粒子の究極の知見と比較すれば推論できものだから、全くの架空の推定ではない。

今一つは5次元の世界だ。リサ・ランドール博士は、1999年この現実世界が4次元でありながら5次元の世界が接続しているとの理論を発表した。我々は4次元世界に閉じ込められているが、重力素粒子は5次元の世界で自由に動き回るという理論だ。

このふたつの仮説は、人間の知られざる本質を、特にスピリチュアルな本質を解明する補助線としてどうしても必要なものである。50年100年後には宇宙科学が新たな発展を遂げ、これらを証明すると願っている。

Q1 人間はどこから来たのか、どんな存在なのか、どこに行くのか。

これはベルクソンの哲学をそっくり引用したい。生命の起源は宇宙にある。地球に根をおろしてから生命は、それぞれに枝分かれしつつ、20億年の間、生命原理である創発力エランビタールによってより良い生命へと進化していった。そしてその先端に人間はいる。広大な宇宙には知的生命体が存在することはこの説から十分ありうる。この太陽系の地球という惑星に降り立った生命体の発端が、宇宙から飛来したという証拠をNASAは発見している。

地上で生命はめぐまれた環境で進化し、その先頭に立った人間は初めて精神を持った。精神は肉体から独立できるものとして成長した。そのような精神をいなく人間はさらに進化する。精神上の進化に道が残っている。やがて人間は宇宙のいのちの根源である存在に限りなく近づいていく存在である。そして今はその道半ばにあり、もうすぐその全体が見渡せるところまで来ている。

Q2 人間の精神はどんな構造をしているのか。それはどのように生まれどこへ行くのか。

生命は生命からでないとも生まれえない。この哲理を拡大して精神は精神からでないとも生まれえないとする考えから、古くからの輪廻転生説が最近のバージョンとなって語られている。しかしその空間の飛来と肉体への潜入はどのようにできるのかなどを説明したものは見つからない。やはりそれは無理があると思う。その替わりにたてた私の仮説は次の通りである。

人間は、精神体の萌芽である精神発芽細胞ともいうべきものを持って生まれる。それは両親から受け継ぐのである。いま人間は、DNA という長大な化学分子のラセン構造の遺伝子に過去の肉体情報を凝縮した記録体を両親から受け継ぐことを知っている。それと同じように精神発芽細胞も過去の経験を凝縮した記憶をもっている。仮に XSA と名付けておこう。それは人間がまだ知らない重力子素粒子群がつくる重力分子構造体からなっている。(重力分子といっても重いわけではなく重力波に反応し、電磁波にはほとんど反応しない性質を持っている。人間の知っている素粒子群は、電磁波に鋭く反応し重力波にはほとんど反応しないのと正反対の性質を持っている。)

稀に過去生の記憶をもっている人が出現する。転生の証拠と言って大騒ぎになる。漱石の夢十夜にもそのような夢が登場する。誰でもが自分の深い記憶倉庫に降りることはできないので、万人に顕現することはないが、XSA にはおびただしい先祖の記憶が入っているから、それにアク

セスできる特別な才能の子供がいたら過去生を語ることはありうることだ。

この精神発芽細胞 XSA には DNA とは異なり、単なる記憶装置だけでなく、本能的直観の認識装置も備えている。生まれたばかりの赤ちゃんもお腹がすけば泣けばお乳がもらえると知っている。人間は肉体の成長に伴い XSA をもとにして精神細胞体（仮に SA と名付けておく）が成長してくる。SA にある記憶装置部分には生まれたときに持ってきた過去の凝縮部分に追加して徐々に自分自身の生活に伴う記憶を蓄えていく。

そしてやがて人間が自我を意識できるようになるころから、SA は飛躍的に成長し、徐々に肉体から自由に分離できる能力を持つようになっていく。（普通の人には肉体にいのちある間は分離することはない。いのちあるうちに分離できれば体外離脱という特殊なことになるが、訓練すればできるのかもしれない。）

人間は肉体を持った生物なので、社会で働いて食べ物を得ていかねばならない。そのために人間は複雑な大脳皮質を発達させて、言葉をはじめとするあらゆる知識を学習をすることによって理性的な思考をできるようになり、社会生活を円満に果たせるように肉体的存在をガイドする。その時、精神細胞体 SA は裏役に回る。ベルクソンが指摘するように生活に必要な記憶や感情的な直感はむしろ邪魔なものとして理性が抑え込んでしまい、日常の生活の場にはほとんど顔を出さず、おとなしく記憶の貯蔵場所となっている。が、時に身の危険が及んだ時などでとっさの判断が必要な時に SA は「勘」として支援するような形で働く。また非論理的な感情の飛躍によって創造する芸術の制作の時には見事に働く。

肉体は物質であり、細分していけば化学分子となり、最後はおなじみの素粒子《電子陽子中性子》に行きつくが、この精神細胞体 SA はそれとは基本的に違ったグラビトン系の重力子素粒子群から構成されている。今のところ人間はその存在の検出能力を持っていないので、存在しないと決めつけているだけだ。

しかし科学が愚かにも否定しても、経験的には精神細胞体 SA は立派に存在し活躍している。人間の精神は、肉体とは違って、時間空間を越えて動くが、そのことが精神は肉体とは違う特質を持っていることを証明するものだ。

気功の達人は「気」の力で離れた人をも倒すこともできる。「気」は生体重力波だ。精神細胞体 SA が、重力子素粒子群であり、生体重力波を発信し、受信する独自の機能を持っているからできる技だ。「気」もテレパシーも生体重力波の作用だから、現象的には知られていても、電磁気的手法では検出できないので、今の科学は否定することになる。

重力波と聞くと、最近東大の「かぐら」のような深部地下に巨大な装置を使って、宇宙のビッグバンなどの強大な重力場の揺らぎを捕えようとしているプロジェクトが有名なので、人間には縁遠い巨大スケールの話だと思ってしまう。

重力波を検出するには、このような巨大装置を必要とするのにはわけがある。我々が普段接するすべての物質は、電磁性の「素粒子」から成り立っているが、実はこれらの素粒子は質量を本質として持たないことがわかっている。^{*12} これらの本質は電磁気量とその回転（スピン）にあるのだ。その代表選手は光子だ。光子は光の速度で動き質量はゼロで電磁波だ。電子やクオーク（陽子や中性子の成分）も電荷に比べると不釣り合いに小さい質量しか持っていない。元来これらは質量を必要としない存在で、ひよんな過程でついでに質量を持ってしまった存在なのだ。そのような質量を得意としない物質をつかって、質量が絡む重力波を発生または検出しようとするから、滑稽なほど馬鹿でかい装置が必要となるのだ。実際、東大で行われた初期の重力波実験には 400Kg の鋼鉄の丸棒を毎秒 30 回回転させ、発生する重力波を 10m 以内においた重い共振アンテナで検出する実験が行われた。^{*13}

ところが重力波素粒子群が高度な分子群を作れば、それが揺らぎさえすれば重力波が発生するだろう。精神細胞体 SA は重力系素子からできているから、それらが生体重力波を発信し受信し、また重力波エネルギー

を目的に作用させることはいとも簡単なことだと推定できる。気の流れはこの生体重力波と推定できる。遠隔した場所で起きる不思議な心霊現象のテレパシーや PK サイコキネシスは、この生体重力波を駆使する仕事なのだ。

ユングの「無意識」の深層心理の存在、そこにある「共通無意識」や「元型記憶」「共時性」*27などは、通常時は大脳皮質が支配する表面的心理に覆われてひそんだ存在である精神細胞体 SA の記憶であり、その仕事と分かれば何の不思議もない。

人間は成熟して子孫を持てる準備に入ると、DNA と同じく、この精神細胞体 SA から、元来受け継いだ精神発芽部分の新 XSA を再生して、それを精子卵子に入れ込むのだ。その一部には自分が生んだ新しい記憶分も入り込んでいるかもしれない。過去生の記憶や精神的な遺伝は、怪しげな輪廻転生でなく、立派に両親から受け継ぐのである。

この直観的認識機構と記憶装置を備えた精神細胞体 SA は、肉体の死後肉体から離れて新しいのちの世界へ旅立つのだ。輪廻転生のために戻ったりはしない。ゲーテが「ファウスト」の終幕で描いたように。

Q3 天国はこの地上にあるとイエスはいった。それはどこなのか。

さてその旅立ち先はどこだろうか。イエスは「神の国は見える形では来ない。ここにある あそこにあるといえるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(ルカ 17-20) といった。通常の解釈は、おたがいに許し合い愛し合う世界ができれば、地上こそ天国だと言われたのだと思っていたが、実はもっと意味が深いのだ。

20 世紀の後半、素粒子論は究極の存在として「ひもまたは面」の振動体を理論化した。それは 11 次元の存在である。ハーバード大学の終身教

授リサ・ランドールはこの 11 次元の世界のうち 6 次元は縮退して影響はないが、5 次元は残って我々の周りに接続し、5 次元空間としてひろがっていると推論した。しかし我々は時空の 4 次元世界に閉じ込められているが、重力子だけは 5 次元の世界へと自由に飛び出せるとした。^{*14}

つまり我々 3 次元の肉体には許されていないが、重力子素粒子群から成り立っている精神体は、この 5 次元の世界へ飛び立っていくことができるのだ。我々には見えないが、今この世の足もとに 5 次元の世界が接続していて、そこに入る精神体は、一挙にワープして何光年先の世界はむろん、さらには別宇宙にすら自由に動き回れるのだ。

素粒子理論から人間の死後の精神の行方が示唆されたのである。

Q4 これらをわきまえれば新人類となるのか。

人間の精神は、死後も新しい命を生きるという確信を持てばベルクソンが言うように新人類となるのだろうか。もう一度彼の言葉を引用しよう。「大部分の人にあって素朴に信じられている死後のいのちについての漠然とした思いが、この精神科学の新たな発見によって人々の確信となりさえすれば、人間は今のような快樂にかじりつくことはないだろう。それは、人間種にふさわしい精神のエネルギーを与え、その時人類は新しい種に飛躍することだろう。」(道徳と宗教の二源泉)

人間種の次なる飛躍があるとして、もしそれが肉体的なことであれば、たとえば身長が 2 m を越えるとか、酸素がなくとも生きて入れるとかいったものであれば、それはそう簡単なことではない。しかし人間種の進化があるとすれば、それは精神的なものであろうと、生物進化学の今西錦司氏も言っていることだ。

また精神の飛躍といっても、例えば記憶能力の飛躍とか、頭の回転の速さといった方向はコンピューターを生み出した人間はそれと競争するのは得策ではないことは知っている。となると進化はこころの豊かさの方向だ。

原始人から始まって、人類は食べることを必死で努力し、ついで衣食

住の安定と豊かさを求めた。そこにいつも同類の人間との間の競争があった。つい最近まではその競争は、殺し合いすらいとわなかったのである。いまは武器に替わってお金はその手段である。この人間同志の争いしか考えない人間は、理性を持つ動物の段階にとどまっている。

人間が、自分もつ精神は、現世の限界をも超え、やがて宇宙をも越えていくすごい存在だと理解すれば、それに最大の価値を置くようになるだろうから、やはりベルクソンが言うように世界は変わる。

今、アメリカでは臨死体験者が団体を作り、自分たちはあの世を見てきたのだから、新人類になったのだと称している。あるいは宇宙から地球を見たものや、その体験を分け与えてもらった者は新人類に近づくと
いう人もいる。

意外にも新人類への飛躍は近いところにあるのかもしれない。

以上

<終わりにあたって 恩師加藤先生への謝辞>

10 数年前、高校の恩師加藤栄一先生から「野口君、ベルクソンを読みたまえ。特に全集の 4 巻と 6 巻を」といわれ、マルクス・エンゲルス以来の哲学に取り組んだ。今回この「精神のエネルギー」でひとまず卒業できた。ベルクソンを学ぶことが、意外にも人生後半に出会ったイエスの同伴者としての哲学的バックアップとなったことがありがたかった。

今回の調査中、思いがけなくも先生からいただいた本に再会した。アメリカ西海岸のニューエイジの旗頭 K・ウイルバーの「空像としての世界」*9 だ。この本を再読中に、先生の懐かしい字で欄外に書き込まれたコメン

トを見つけた。先生はここまで先回りしておられたのだと発見して、頭の下がる思いがした。

先生は晩年のある日「わしゃ、死後の生はあると思うよ。しかし個性は失うかもしれない。」とっておられた。私は当時カトリックの洗礼を受けながら、「永遠のいのち」については、なかなか信じられないでいた。先生は、ここでも先達として、この一言で死後のいのちの継続についての信念をバックアップしてくださった。

ただ唯一「個性は失うかも」だけは勘違いであってほしい。あの豊かな個性を持って先の世に居られ、またお目にかかれることを願っている。

参考文献

- *1 小林秀雄 信ずることと知ること p 187 弥生書房 1991
- *2 藤田尚志 唯心論と心霊論—ベルクソン哲学における催眠・テレパシー・心霊研究 NII-Electronic Library Service
- *3 石川幹人「超常現象」を本気で科学する 新潮社 2014/5/20
- *4 C.G.ユング 個性化とマンダラ みすず書房 1991/9/26
- *5 アーネスト・トンプソン 近代スピリチュアリズム百年史 桑原啓善訳 でくのぼろ出版 2011/2
- *6 浅野和二郎 心霊科学からスピリチュアリズムへ 神霊主義 でくのぼろ出版 2003/1
- *7 浅野和二郎訳 永遠の大地 潮文社 H22/11
- *8 ケン・ウイルバー 万物の歴史 大野純一訳春秋社 1996
- *9 ケン・ウイルバー 空像としての世界 井上忠ほか訳 青土社 1984/4
- *10 西平直 魂のライフサイクル ユング・ウイルバー・シュタイナー 東京大学出版会 1997/7

- *11 トランスパーソナル心理学入門 諸富祥彦 講談社現代新書
- *12 質量はどのように生まれるのか 橋本省二 BLUEBACKS 講談社
2010/4
- *13 時空のさざ波 重力波を求めて 坪野公夫 丸善 1986 (s 61) /6
- *14 ワープする宇宙 五次元時空の謎を解く リサ・ランドール著 向
山信治監訳 塩原通緒訳 NHK出版 2007/6/30
- *15 2012 目覚めよ 地球人よ いよいよ始まった人類大転換の時 坂
本政通著 ハート出版 2008
- *16 光のアカシヤ・フィールド 超スピリチュアル次元の探究 よしも
とばなな×ゲリー・ボネル 徳間書店 2009/7
- *17 あなたが「宇宙のパワー」を手に入れる瞬間—永遠に続く幸せの源
泉 デイパック・チョプラ 大和出版 2007/4
- *18 人類と地球のアセンション だからこれからこう生きよう 船井幸
雄 2006/1 徳間書店
- *19 神の使者 ゲイリー・R・レナード 吉田利子訳 河出書房新社
2007/1
- *20 日本の 10 大新宗教 島田裕己 幻冬舎新書 2007/11/30
- *21 スザンヌ・ワード著 マッシュブック特別篇 現代社会のスピリチ
ュアルな真相 森田玄 きくちゆみ訳 ナチュラルスピリット 2008/11
- *22 アウグスト・クリ著 人間イエスを科学する エハンデラヴィ訳
サンマーク出版 2006/5
- *23 大谷暢順 人は死んでもまた生き続ける 幻冬舎 2015/12/10
- *24 死ぬ瞬間 E・キュープラー・ロス川口正吉訳 読売新聞社 1971/4
- **25 臨死体験 上・下 立花隆 文春文庫 2000/3
- *26 証言 臨死体験 立花隆 文春文庫 2001/8
- *27 共時性の宇宙観 湯浅泰雄 人文書院 1995/7
- *28 宗教と科学の間・共時性・超心理学・気の科学 湯浅泰雄 名著刊行
会 1993/7